



気味



泰然自若

ある人が大きな黒い馬を乗りこなそうと躍起になっていた。街道を覆い隠す雑木林の中で、はっきりと口を開けた場所があったのだが、そこでやたらと大きな嘶（いなな）きとともに、男が負けじとばかりに大声を出していた。

彼は傷だらけになりながらも、その人は実に気味の良い笑い声を挙げて馬に乗ろうとしていた。周りには数人の男衆が、邪魔にならないよう離れつつも慌てていた。時折、「とのっ」などという切羽詰まった大声が張りあがるほどであった。

私はしがない牢人である。だからこそ、関わり合いになりたくはなかった。下手な因縁で斬り殺されるなんてこともあるのだから、怖い話である。ともあれ、道すがら見えてしまう光景なのだから、私のほかにも通行人はそれなりに行き交い、笑顔を作る者もおれば、怪訝そうに去って行く者と様々であった。

その内、私の背中から二人の男による話声が聞こえてきた。

「あれは、悪魔の馬でないか？ 近頃、軍馬にしようとして手酷いけが人を出した馬は、確かに黒い馬だった」

「あの大きさに気性の荒さときたら、それしかあるまい」

私は視線を馬に戻す。なるほど、普通に見かける馬よりも確かに大きく、『との』と呼ばれている男もそれなりに大柄な風体ながら、木の葉の揺らめきに近しい吹き飛び方をしているのだから、気性も相当に荒っぽいことが良く判る。

私はその光景、その馬に興味を抱き、耳を傾けた。

「木幡（こばた）様も物好きだな。家臣の者が悪魔の噂を聞きつけて、乗って見せると言ったら大けがをしたらしいじゃないか」

「あの様子じゃ、仕置きで馬刺しにするつもりでもなさそうだが、さてさて、どうなることやらね」

「しかし、あのような黒い馬で戦場（いくさば）に姿を見せたあれば、敵も震えあがりそうではあるな」

「その光景が、苦もなく浮かぶのだから、木幡様の武名にはほとんど呆れてしまうよ」

二人の男はそう言って笑い合っていた。

木幡 | 某（なにがし）とはこの辺の豪族で、鬼木幡といえは五十余騎で千二百余の軍勢を退けたこともあると、私は聞いたことがあった。そのような男だからこそ、悪魔と噂される黒い馬に乗ろうなどと意気込み、何度も大地に落とされようとも挑み続けることが出来るのだなと感心したものだだった。

「ふむ」

私はそのころ、ちょうど腹が空いていた。なので、腰をおろして飯でも食おうとした。適当な場所が見受けられなかったので、少々うるさいが騒いでいる集団に近寄って、腰を落ち着けた。

男衆は私に気づくこともしなかった。もっとも、これでもかというくらい近づいたわけではなく、あくまで街道筋から逸れて、休憩中だということが判る程度の間合いに留めてあるので、気にならないのも当然のことだ。

飯をゆっくりと食いながら、男衆の大声会話を拾い上げて行くと、どうやら木幡某は数日前からこうして、馬相手に身体を張っていたそうだ。ご苦労なことだと私は思わず独りごちた。

馬の方も、木幡某の方も、互いに疲れてしまったのか急に大人しくなったのは、私が欠伸をして飯を食い終えた頃合いだった。その頃には、幾人かの見物人が私と同じように腰を落ち着けていたが、騒ぎが終わると予想したのか、皆がそそくさと逃げるように立ち去って行った。そうになると私も立ち去る方が波風立たない気もしてきたが、両者の空気が少々ながら穏やかになっているようで、そのことがどうしても気になった。先ほどまであった馬の荒々しい息遣いが消えてしまったのではないかと思えたほどだ。しかし、見たところ馬の外見に一切の変化ものないのだから、私の思い違いだと思った。とはいえ、何か起こりそうだと思った私は、その後も目ざとく見定めていると、木幡某はそっと、まるで女子（おなご）の絹肌に触れるほどの丁寧さをもって、馬の額を撫でた。すると、どうか。馬は暴れなかった。

「見事なものだ」

私が思ったことをそっくりそのまま呟いた人物がいた。首を動かし、右手を見ると、老僧が一人。目を細めながら、実に穏やかな顔をしているその爺は、躊躇なく馬の元へ近寄って行った。声をかけて止めた方が良くと思う自分も、もちろんながら存在していたのだが、どうしたって、これから起こるのは面白いことだと信じて疑わない自分自身が身体を乗っ取っていたのだから、喉から声が出てくるはずはなかった。

老僧は始め、男衆に咎められていたが、構わず馬へ近寄った。木幡某は少々警戒していたようだが、刺客ではなく、単に馬目当てだと思ったのか、静かに馬を撫でた。襲うなどでも言いかせているようであった。

老僧はとうとう、馬の横に立つ。するとどうだ、馬は勢い良く老僧へ馬首を向けた。そして顔を近づけるとしきりに老僧の回りを歩いた。これには皆が息をのむ。てっきり、木幡某が落ち着かせなければ、今再び暴れ回るかと思っていたからだであろう。しかしながら、私はどうにもそのような光景は起こらないと決め付けていたので、男衆ほどの驚きもなく、成り行きを見守った。

老僧が一言、何か言ったのだろう。木幡某が頷くと、老僧は馬を先導するように歩き出していく。それに導かれ、馬と、その馬に跨った木幡某がゆったりと歩き、その後ろを男衆がいくばくかの間合いを取って、突き従った。ついでを言えば、私もその後ろに付いていった。男衆は目の前の光景で頭がいっぱいのものであったが、木幡某は私に気づいているようで、馬に跨る時に視線を合わせてきたので、目礼を行えば、特に何かをしてくることもなかった。これは付いていても良いと思い、老僧を追うことにした。

そこは草原と言うにふさわしい場所であった。日が陰りを見せ、赤く燃え上がる空がありながらなお、大地は青々としていた。

老僧と木幡某が会話をしているのが見える。互いに柔和な笑顔であったが、木幡某は笑い声を挙げた。どうやら話が終わったようではあったが、木幡某は勢いよく馬を走らせ始めた。その頃になると、男衆もどこか儂げで、先ほどのような慌ただしい顔つきなどをしていることもなくなっていた。

私は堂々と、老僧に声をかけた。男衆は私を睨みつけたが、老僧は「先ほどの、」と言って如何にも知己の間柄を装ってくれた。私はその好意に目礼で感謝を表しつつもことのあらましを聞くことにした。

「一頭の馬が死んでいたのですよ。黒い、馬が……この草原の隅っこで」

その一言で、私は全てに得心がいった。その後も、紡がれる話に、私は自然と駆け抜ける人馬を眺めた。きっと、私の顔も先ほどみた男衆のような顔つきになっているのだろうな、と感じ入りながらもただただ、優美さを刺激するその光景を拝んだ。

老僧は、私の失礼を指摘もせず、最後まで話をしてくれた。

「……そうですか」

「はい」

穏やかだった。今と言う時全てが、どうしてだか穏やかに感じられた。

「それにしても、実に軽快な走りをみせてくれるものだ。私には、古くからの仲間に見えてしまうよ」

「そうですね。さきほどまでの争いは、仲が良いからこそできる喧嘩だったのかもしれませんが」

人馬一体の体現が、そこにあった。木幡某の、楽しそうな声が響いた。彼は心の底から乗馬を楽しんでいた。それが、ただ楽しんでいるのではないことなど、この場にいる全員が本当によく判っていた。だからだろう、私は木幡某に惚れてしまっていた。

たかが、馬。されど、馬なのだ。時に家族と同じくらいに繋がりを、愛情を持って世話をし、接する。それが、馬であり、軍馬なのである。木幡某は、それを十二分すぎるほどに、理解していた。

彼は、噂通りの武人だった。風のように走る人馬は、日が暮れるまで、想うがままに走りまわった。

後日、私が紹介状もなしに木幡の門を叩いたのは、その場の勢いだけでは、決してなかった。